

〔収量向上は必ずしも妥当な目標か〕

具体的にどのような自分の畑の収量調査を行なったら良いのかを少し書いてみましょう。一般的な収量調査のように小さい面積を徹底的に調べます。そんなに大きな面積である必要はありません。収量調査でよく行なわれるような坪刈り（一坪の調査）で十分です。区画内のすべての収穫物について、一つ一つの重量を測定します。特に出荷できない不良品の数、その理由をチェックすると良いでしょう。

同時に前回述べました株の間隔（株間）というのはかなり重要な測

定項目です。さらに収量と最も関係性の高い土壌の物理性を測定するのも一つの手です。一般には普及していませんが、私が使用しているのは貫入式土壌硬度計という測定機器です。一つの畑で3カ所程度サンプルを採ればかなり正確になります。調査は皆さんの時間の都合に合わせて行なってください。

収量調査を行なって、 数字で畑を把握する

単独の農場だけではなく、周辺の農業経営者を巻き込んでデータを増やした方がよいですね。というのは、同じ経営者の畑は同じ傾向になりやすく、比較することができません。単純に収量調査をするだけでは面白くないと思いますので、使用する何らかの資材や、栽培方法を変えて比較してみると差は明確になります。

どのような不良品が最も多いのか？ ほ場ごとの違いはどうなっているのか？ 大きさのばらつきはどのくらいあるのか？ 土壌分析の結果（化学性）と収量の関係は？ そして収量（出荷量）の違いは何によるのか？

自分の畑の収量把握度チェック

- 毎年、収量調査（坪刈り）を行なっている
- 調査は何枚かの圃場で実施している
- 全圃場で必ず収量データを記録している
- 区画内の収穫物一つ一つの重量や大きさを測っている
- 土壌分析データと収量データを比較している

本連載を読んで、実際に自分の圃場の詳細な収量調査を始めてみませんか。

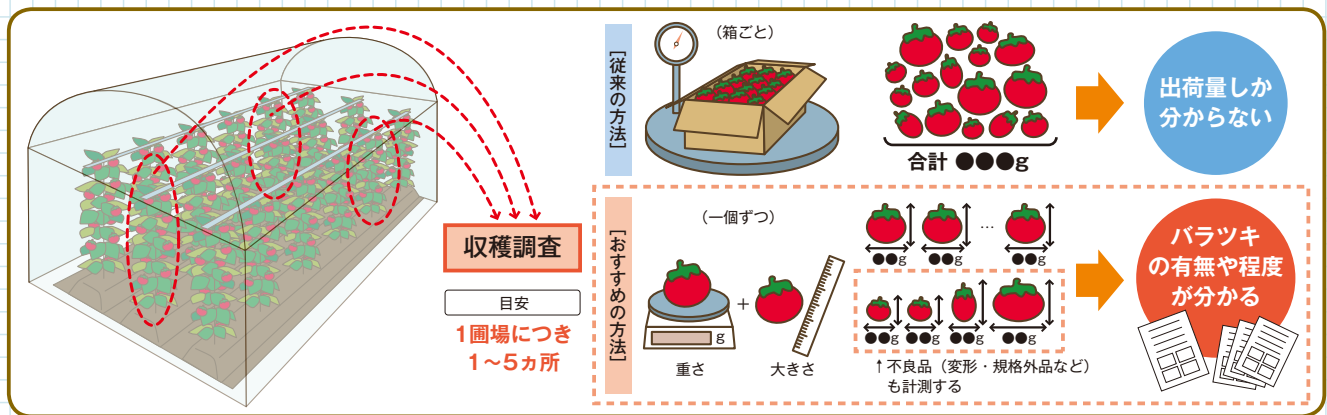
岡本 信一 Shinichi Okamoto

1961年生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業後、埼玉県、北海道の農家にて農業研修。派米農業研修生として2年間アメリカにて農業研修。種苗メーカー勤務後、1995年 農業コンサルタントとして独立。1998年(有)アグセス設立代表取締役。農業法人、農業関連メーカー、農産物流通企業、商社などの農業生産のコンサルタントを国内外で行っている。講習会、研修会、現地生産指導などは多数。無駄を省いたコスト削減を行ないつつ、効率の良い農業生産を目指している。

Blog : 「あなたも農業コンサルタントになれる」

<http://ameblo.jp/nougyoukonnsaru/>

PROFILE



これらをデータ化することで、自分の畑で起きている最大の問題が見つかり、どのような栽培管理をすべきなのか徐々に分かってくると思います。また、数字として利用するためには、高度な解析が必要になりますが、データさえ残っていれば、将来解析を行なうことも可能です。

不良品を発生させる一番大きな問題に取り組めば、不良率は改善し、出荷量は増えるということになります。こういった方法が数値管理の第一歩なのです。くり返しになります。数字管理というと数字でコントロールすることをイメージする方が多いのですが、その前に数字で自分の畑がどうなっているのかという実情を知ることが最大のポイントです。問題が分かれば、その解決方法はいくらかもあるのです。

条件に見合った改善で悪い畑はそれなりに

自分の畑の状態を知らないために多くの技術改善の場面で悲劇が起っています。一例に収量▲▲トンを目指すといるものがあります。実は、収量を上げるといのは、工場に例えれば生産能力を上げるといことなので、かなり大きな改善が必要になります。現在、日本の農業は、多くの資材と技術を投入し、世界的に見ても反収は高いレベルにありま

す。果たしてさらに収量を増やす必要があるでしょうか。

同じことをしても、収量が上がる畑と上がらない畑があります。多くの方が収量の上がない畑を一生懸命変えようと努力しています。土壌の物理性については次回に詳しく述べますが、土壌改善が行われたとしても、それぞれの土壌には限界があります。これまで様々なデータを測定し、改善策を施した結果からいえるのは、悪い畑はそれなりにいいということ

です。

こんなことを書くと、お叱りを受けそうですが、土壌の物理性から見ると現在の栽培方法では既に限界の収量に達しているという畑も多く存在するのです。つまり、もともと土壌条件から多くの収量を望むべきではないのに、一律に収量の目標を掲げたりします。土壌物理性の観点から、すでに限界までの収量を上げているとすれば、栽培方法の根本的な見直しが必要となります。むやみに収量を上げるといことは、経営の観点から見るとあまりお勧めできません。むしろ、収量増という観点を捨て、先の不良率を下げるなどの有効な手立てがありそうであれば、そちらを優先して改善策を施すべきではないかと思えます。

また、無駄なコストを削るということも、経営にとっては非常に有効でしょう。一つ一つのほ場条件は、同じ経営者の方のほ場でもそれぞれ違います。その条件の違いを知りつつ、その条件に見合った改善をしてゆくという地道な努力が経営改善につながります。これからの経営の向上のためには、このような小さな努力の積み重ねが必要になってくるでしょう。

私自身も多くの畑に足を運び、指導をしてきましたが、数字で把握することによってあらためて多くのことに気づきました。指標として最も当たり前の施肥量もそうです。現在の施肥量は多くの作物において過剰です。多すぎる肥料・堆肥の投入がほ場に悪影響をもたらしている事例が多いことをかなり実感することができました。

株間のこともそうです。株間が大事だということは誰でも知っていますが、そのばらつきが収量や品質に非常に多くの影響を与えているということも理解できました。これもこれも畑のデータを測ってみて初めて把握できたのです。

是非、読者の皆さんも自分の畑の現状を数字にしてみてください。調査にかかる手間以上の結果を得ることができると思えます。